

●発行日：2015年3月21日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

||||| 発行:教材出版 学林舎



学習カリキュラムを考える

小学校低学年カリキュラム

学習カリキュラムを考える

求められる個人別化!?

学

習カリキュラムを考えるのあたって重要なことは
何でしょうか？「学習目的・目標」「学習効果」

「学習の習慣付け」など。学習する側が、何を求めて、学習を通してどのように自分を向上させたいかによって、学習カリキュラムは個人別に必要です。ただ、学校など多くの教育機関は、時間・指導する側の都合上、個人別のカリキュラムではなく、年齢・学年・履修状況・費用対効果に応じて、“枠”としてカリキュラムが提示されています。

学習塾は、いち早く個人別カリキュラムを“個別指導”という形式で提案しました。他業種を見ると、フィットネス、美容業界などはいち早く個人別サービスをおこなってきました。ここ最近、CMなどでよく目にする3ヶ月前と3ヶ月後のフィットネス効果＝結果を示した映像は、個人別サービスの“極”の一つといえます。当然、それだけの費用をかけたのだから、効果は然るべきものと考えられますが、教育分野も“経済格差による教育格差”という言葉があるように、費用対効果による学習効果は様々な場面であらわれてきています。しかし、費用をかければ学習効果が必ずしも上がるのかということそうではない事実が存在します。理由は明確で、学習者自身（小学校高学年以上）の学習意欲（学習過程・効果を実感できる）の差にあります。ただし、未就学児童から小学校低学年に関しては、成長段階における状況が個々によって違ってきますので、アプローチは変わってきます。

小

学校低学年カリキュラムを考えるにあたって、いくつかポイントがありますが、一番大切なのは

“継続した学習習慣と学習方法の獲得”です。これが身についていないと、年齢を重ねるごとに学習の幅が狭まり、学習することが困難になります。学校での学習は、最低限必要な学習“知”を獲得すること。そして、学習習慣と学習方法を身につける場です。小学校低学年の子どもたちにとって、学習基礎を築く大切な期間です。ただ、ここで気をつけたいのは、学校の学習はあくまでも“基礎学習”であるということです。そのため、学校外の学習（塾、家庭学習など）において、学校と同じ基礎学習をすることは状況によっては必要かもしれませんが、学校ではできない学習習慣や学習方法を身につけることがカリキュラムを構成するにあたっての課題です。

“考える学習の習慣付け”

学校ではできない学習の一つに“考える学習の習慣付け”があります。目的は、与えられた問題をじっくり考え、理解できなければ、辞書や参考書などを使い、調べ学習する習慣を身につけることです。低学年ですので、状況に応じて考える時間を設定する必要があります。継続して学習できるかがポイントです。

考える学習カリキュラムを構築するにあたって、学林舎では成長する思考力GTシリーズ国語・算数を推奨しています。GTシリーズを使ってのカリキュラムに関して、教材カタログ、学林舎ホームページで紹介しています。

*学林舎では、学習者の学習状況などをお聞きして、学習カリキュラムなどを提案しております。



科目学習を考える

国語力を上げるには!?



国語力を上げるには「読解」「要約」「表現」、3つの学習が必要です。そして、様々なジャンルの文章を読むことによって、読むリズムを体験し、経験化しなければ国語力は向上しません。では、どのような学習をすれば国語力が向上するのでしょうか？

そのためには、年齢に応じた国語力があるかどうかを分析しなければいけません。分析するにあたって、国語の教科書はもっとも適している学習素材のひとつです。例えば、小学校3年生で、小学校1、2年生の教科書内容を読解できなければ、基礎から見直す必要があります。逆に3年生で4年生の教科書内容が読解できるのであれば、3年生の内容では物足りないと判断できます。学林舎の成長する思考力G T国語シリーズは、小学校低学年に関しては、10・9級いずれか（1～2年生内容）から学習することを推奨しています。3年生がG T国語10級を学習をして、書き間違えや問題文を理解できない場合は、基礎学習を見直す必要があります。見直す上で、ポイントなのは間違った理由です。間違った理由を自分で自覚できていない場合は、何が理解できていないのかを明確にする必要があります。明確にすることをしていないとあとで、必ずツケがまわってきます。できないことは、なぜできないのかを子ども自身が理解し、どうしたらできるようになるのかを思考する学習習慣を身につけなければ国語力のみならず、他の科目学習においても向上することは困難になります。



親の思い、子の思い、そして環境



受験シーズンが終盤を迎えています。受験の根幹には、何があるのでしょうか？中学受験で考えれば「良い中学校に進学すれば、良い高校・大学に進学、良い会社に就職、安定・安心の生活がおくれる・・・。」この思考が根幹の片隅にまだないでしょうか。50年前も現在も、日本社会を見ると高校卒業と大学卒業の給与が違うことは、事実です。こういう現実を親は、自分の経験から学び、自

び、自分の子どもには良い大学に行ってほしいという思いが強くなりました。そのため、中学受験を我が子にすすめてきた経緯があります。子どももそんな親の思いを感じて、そして親の期待に応えるために中学受験という競争の渦の中に飛び込んできました。しかし、50年という時代の流れの中で、中学受験による様々な弊害がでてきたのも事実です。世代が替わり、中学受験を経験した親が子育てをする状況の中、中学受験が、子どもの成長段階に悪いという考えをもった親や指導者があらわれ、中学受験を否定する動きも増えてきました。

ただ、この賛否両論は、立場や環境が違うことによって生まれたものであり、どちらが正しい、どちらが間違っているとはいえないものではないでしょうか。

いま一度、子どもたちに何を学ばせるのか？どのような進路に進ませるのかを考える時期にきています。



子どもたちに必要な学び!?



子どもたちに必要な学びは一体何でしょうか？「人としての教養」「グローバルな感覚」「多言語の習得」「思考から実施の行動力」「協調力」「独創力」など様々なことが子どもたちには要求されています。20年、30年前は「学歴」を身につけることが学びの結果として当たり前でした。しかし、学歴ではどうにもならない現実が今到来しています。日本の人口が減少していく中、日本国内での内需需要が低下ししつ々ある現在において、技術をもっていないでも活かさない状況があります。この状況を教育現場は、直視しなければいけません。何が未来を築く子どもたちに必要なのかを・・・。

現場によって、その役割は変わっていきますが、最終的な教育的指標は変わりません。「子どもたち自身が、自分で考え、自分で選択し、自分で人生を切り拓いていく力を身につけるためにサポートする。」そのために、個々の教育、学習現場でできることを私たち大人は見直さなければいけないのです。そして、実行していくことが何よりも大切ではないでしょうか。

国語を 考えてみる

文／学林舎国語顧問 森本 秀俊

ああ、素晴らしき哉、日本語⑪

寒 さもやわらぎ、いよいよ春の到来です。「春と聞いて連想するもの」というあるアンケートの結果、次のような言葉が上位にきました。

- 第1位 花見
- 第2位 花
- 第3位 入学
- 第4位 卒業
- 第5位 出会い

この結果は、私が予想したものとはほぼ変わらぬものでした。日本人の「春」は第一に「桜」なのでしょう。「花見」の楽しい思い出は、多くの人的心里に残っていると思います。第2位の「花」は「桜」に限らず、いろいろな花のことを指しているのでしょう。春の代表的な花といえば、「桜」のほかに、「梅」「桃」「チューリップ」「ヒヤシンス」などがあります。そして、春といえば「出会いと別れの季節」です。普段着なれない正装をし、期待と不安が入り混じった複雑な表情をしてたたずんでいた「入学式」。数年間いっしょに生活し、喜びも苦しさも恥も共有した友だちとの別れを惜しみ、なかなか校門を出ることができなかった「卒業式」。第5位の「出会い」は、学校行事に限らず、会社での出会いや、新生活のスタートとともに始まるいろいろな人たちとの出会いもふくんでいるのでしょうね。今回は、よくも悪くも心がみだれることが多い「春」の言葉を見ていきたいと思います。

東風吹かば 匂いおこせよ 梅の花
主なしとて 春な忘れそ

これは学問の神様といわれる菅原道真が、九州に左遷ろうときに詠んだ歌です。「春の東風が吹くようになったら、花を咲かせてその香りを届けておくれ、梅の花よ。私がいなくても、春を忘れないで」という意味になります。この歌で使われている「東風」は、「春に東から吹いてくる風」のことです。春を呼ぶ風とされています。

「朧月」は、「春の夜に出る、水蒸気に包まれてぼんやりかすんだ月」のことです。この言葉を聞くと、「朧月夜」という有名な唱歌が思い出されます。

菜の花畠(ばたけ)に 入り日薄れ
見わたす山の端(は) 霞(かすみ)ふかし
春風そよふく 空を見れば
夕月かかりて におい淡し

里わの火影(ほかげ)も 森の色も
田中の小路を たどる人も
蛙(かわず)のなくねも かねの音も
さながら霞(かす)める 朧月夜

今、読み返してみると、美しい言葉で彩られた本当にすばらしい詩ですね。二番の「さながら霞める」なんて、感激してしまう表現です。

「風光る」という言葉もすてきですね。これは「春になり陽射しが強まってくると、吹きわたる風も光って見える」という意味です。この言葉を最初に言ったのが誰であるかは知りませんが、すごい感性の持ち主だったのでしょね。農作業をしながら、「ほらあ、陽射しが強うなってきた、今日は風が光っちよるわ」などと言ったのだとしたら、すごい一言です。

その他にも「泡雪(あわゆき)」「薄氷(うすらい)」「陽炎(かげろう)」「春雷(しゅんらい)」「蜃気楼(しんきろう)」「花冷え」「春うらら」「春告げ鳥」など、「春」は美しい日本語の宝庫です。いい季節になりました。

ああ、素晴らしき哉、日本語。(つづく)

算数・数学から見える世界

文／学林舎算数・数学顧問 深見 和孝

1 か月程前のことですが、新聞にこんな内容の記事が載っていました。

滋賀県の議会での話で、知事が「子どもたちに学ぶ力を身につけさせたい。」というような発言をしたところ、保守系の県議から反発の声が上がったそうです。県議いわく、「学力でいいんだ。」とのこと。知事の「学ぶ力」という言葉が気に入らなかったらしく、「学力」という言葉に訂正させたかったようです。傍から見れば「学ぶ力」と「学力」の違いなどどうでもいいように思えますが、新聞記事になるくらいですから、知事と県議の学校教育に対する考え方の対立を象徴しているのでしょう。記事によれば、滋賀県は全国学力テストの結果が思わしくなく、県議はテスト結果の向上を目指す方向性を「学力」という言葉で言い表したかったようです。県議にとって、学力テストの得点を上げることは県民のニーズであり、その道筋をつけることは政治家の重要な仕事であるわけです。対して、知事の方は、「小5の割合、中2の関数でつまずきが多い。」と、数学教師のような発言をされているくらいで、教育に関しての筋の通った持論をお持ちのように見受けられます。おそらく知事は、学ぶことを子どもが成長する過程を通して捉えたいのではないのでしょうか。

そういう意味では、「学力→テストの点数アップ」、「学ぶ力→子どもの成長」というイメージがあって、「学ぶ力」の方がもっともらしく見えますが、それで学ぶ力に軍配が上がるかという、そう簡単にはいかないでしょう。たかだか「ぶ」が入っているかないかだけの問題ですが、教育に対する向き合い方の違いは人それぞれあって、傍からみると面白いものです。たいていの人は自身が子どもの頃に学校で勉強した経験をもっているので、「勉強する子ども」のイメージが、自分の体験を通して心の中に投影されているのではないのでしょうか。たとえば、勉強はガマンすること、自分を律することとみる人もいるでしょう。逆に、自身がガマンして勉強してきたので、子どもが楽しみながら勉強する姿に理想をみる人もいます。

学校教育とは何かと問われて、生産性の高い労働者を育

するための機関だとか、自立した近代的個人になるための養成システムと回答しては、身も蓋もありませんし、やっぱり教育は尊いものだと思いたい気分はあります。ですから、政治家の間で学力・学ぶ力論争が起こるというのは、とても好ましいことだと思います。むしろ、学校教育の方向性が1つに定まってしまうのは最悪です。政治家の方たちはスッキリした答えを求めがちですが、教育というのは、矛盾を抱えつつやっていくものであればよいと思いますし、矛盾があるがゆえに尊いものとみえるのではないのでしょうか。最後に、ある先生と生徒との1コマです。

先生：テストの点数をとるために勉強するんじゃないよ。自分の興味のあるところから楽しんでやればいいよ。それが君の学ぶ力になるのさ。

生徒：わかったよ、先生。僕、がんばるよ。

先生：じゃあ、この前のテストを返すよ。…おい、何だ、この点数は！授業で教えたことをちゃんと家で復習していれば、こんな点数にはならないぞ。

生徒：でも、点数をとるための勉強じゃダメだから。

先生：何を言ってるんだ。勉強は復習が大事なんだ。毎日コツコツ勉強しなければ学力が身につかないだろう。

生徒：毎日家で勉強して、良い点数をとらなきゃだめなんだね。

先生：そうじゃない。点数をとるために勉強してはダメなんだ。

生徒：じゃあ、点数が悪くてもいいじゃない。

先生：つべこべ言わずに、良い点数がとれるようにしっかり勉強しなさい。

(つづく)

クロスロード crossroad

第43回 文／吉田 良治

2015年3月10日刊行！

『日本の大学に入ると、なぜ人生を間違えるのか』

2013年に執筆した『ライフスキル・フィットネス（自立のためのスポーツ教育）岩波ジュニア新書』に続いて、今年3月10日2年ぶりに『日本の大学に入ると、なぜ人生を間違えるのか（アメリカの成功者たちが大学時代に学んでいること）』が、PHP研究所から刊行となりました。ライフスキル・フィットネスは大学スポーツの人材育成をテーマに書きましたが、今回は大学全体での人材育成について書いております。

この執筆のきっかけは2011年に読売新聞の連載企画で、阪神タイガースのマット・マートンさんと対談したことが始まりでした。あの時の対談はその年に7回連載されましたが、新聞記事は紙面の文字数の関係で、概略程度しか掲載されなかったのも、もっと本質にきりこんで取り上げていきたいと思い、本の執筆を模索してきました。2年前のライフスキル・フィットネスは大学スポーツの人材育成にフォーカスしていますが、これは元々アスリート育成のプログラムではなく、アスリートの前に一人の人間として、社会に役立つ人材を世に輩出する役割を大学が担うべきこととして、今日のアメリカでは広く一般化しています。

近年企業の大学生新卒採用において、企業が求める人材も多様化しています。一時期問題となった就活の長期化も、学生の学業優先をサポートするために、一定のルール化がされていますが、少子化という問題もあり、優秀な人材確保も競争激化しており、インターンシップを含め企業と学生の交流も変化していきます。これまでの企業内における社員教育にも限度があり、学生時代に習得しておくべきこと、要求されるものも変化していきます。こうした時代の変化に対応する上で、そろそろ日本の大学も新たな時代に対応した人材育成をサポートす

る必要がでてくるのです。

マートンさんとの対談では、人生観に教育観、そして仕事観、さらには国家観についても話し合いました。また次世代育成においては、マートンさんご自身の子育ての考えから、国家観の根幹である政治に対する考えなど、今、日本が置かれている様々な社会問題にも、マートンの視点でバツサリ斬り込んでいます。グローバルな視点で海外との関わりが増え、生活環境も国際化している中、多様な価値観と触れ合い、日本人はどう立ち振舞いをしていくべきか。今回の執筆のテーマは、単に海外のまねをするのではなく、海外の状況を理解しつつ、日本の伝統、日本人の良さを如何に受け継ぎ、世界と渡り合うことができる人材育成をどう確立するのか、その問題提起になっています。

今回の執筆に際し、前駐中国大使で伊藤忠商事前会長の丹羽宇一郎氏から、『教育こそ「日本の大問題」子ども・若者は日本の宝』という推薦文をいただき、本の帯に掲載していただいています。商社マンとして海外勤務が長く、世界と渡り合ってきた丹羽氏の経験から、今、日本が取り組むべき人材育成について、大学までの教育機関の役割の重要性をご指摘いただきました。この本が日本での新たな人材育成のその一役となれば幸いです。

レポートの75%をコピーで作成した学生がいたことが、今月東京大学から発表されました。偏差値の高さだけが、人の能力を測る物差しではありません。せっかく育んだ学力の高さを如何に活かすのか、人生を間違わないための人材育成について考える機会となればと思います。

(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog

<http://ameblo.jp/outside-the-box/>